

「本間金蔵の墓碑」について

整理番号 与野一二	題額 本間先生之墓	題額揮毫 小沼佐吉 金子徳次郎	碑記撰文 小沼佐吉 金子徳次郎	碑記揮毫 小沼佐吉 金子徳次郎
--------------	--------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

鐫刻 井原赤太郎	撰文建碑年 一九一九・大正八	住所 本町西	場所 円乗院	備考
-------------	-------------------	-----------	-----------	----

一. はじめに

本墓碑は、明治後期から大正期にかけて、与野小学校に訓導兼校長として赴任し、多くの子弟を育てた本間金蔵の墓碑であるが、筆子塚的な性格も持つ。

○写真1 石碑正面



○写真2 題額





○写真4 石碑背面（下部）



○写真3 石碑背面（上部）

二. 翻刻並に訳注

■ 翻刻

(正面)

◎ 題額

本間先生之墓

(背面)

◎ 碑記

先生姓本間名金藏東京府下大泉村之産也明治二十年四月入埼玉縣師範學校業畢任葛飾小學校訓導尋轉幸手小學校同三十年八月更榮轉與野小學校訓導兼校長爾來二十有餘年致力育英功績顯著被賞賜者數次邑人亦贈金品以彰其德矣先生為人誠實勤勉而能導人又教育支會教友會青年會工女教育等之事業所盡力不尠焉大正七年五月二日病歿享年四十九有三男三女長男太郎現學於東京齒科專門學校長女千代嫁小島家他皆幼也先生之逝也鄉黨哀惜如喪父母相謀葬安養山建碑以長弔英靈法諡曰 忠誠院忍徳教導居士

大正八年五月二日 與野町並他町村有志建之

師範同級生 小沼佐吉 金子徳次郎 撰并書

石工 井原赤太郎

* 異体字等

- 埼 埼。 ○ 縣 縣。 ○ 師 師。 ○ 兼 兼。 ○ 年 年。 ○ 教 教。
- 支 支。 ○ 所 所。 ○ 正 正。

■ 訳注

● 本文 (いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した)

◎ 題額

本間先生之墓

◎ 碑記

先生、姓本間、名金藏。

東京府下、大泉村之産也。

明治二十年四月、入埼玉縣師範學校。
業畢、任葛飾小學校訓導。
尋轉幸手小學校。

同三十年八月、更榮轉與野小學校訓導兼校長。
爾來二十有餘年、致力育英、功績顯著、被賞賜者數次。
邑人亦贈金品、以彰其德矣。

先生爲人、誠實勤勉、而能導人。

又教育支會、教友會、青年會、工女教育等之事業、所盡力不尠焉。
大正七年五月二日、病歿。享年四十九。

有三男三女。長男太郎、現學於東京齒科專門學校。

長女千代、嫁小島家。他皆幼也。

先生之逝也、鄉黨哀惜、如喪父母。相謀葬安養山、建碑以長弔英靈。

法諡曰、忠誠院忍德教導居士。

大正八年五月二日、與野町並他町村有志建之。

師範同級生、小沼佐吉金子徳次郎撰并書。

石工井原赤太郎。

●訓詁

先生、姓は本間、名は金藏なり。

東京府下、大泉村の産なり。

明治二十年四月、埼玉縣師範學校に入る。

業畢はり、葛飾小學校訓導に任ず。

尋いで幸手小學校に轉ず。

同三十年八月、更に與野小學校訓導兼校長に榮轉す。

爾來二十有餘年、力を育英に致し、功績は顯著にして、賞賜を被ること數次なり。

邑人も亦た金品を贈り、以て其の徳を彰はせり。

先生人となりは、誠實勤勉にして、能く人を導く。

又た教育支會、教友會、青年會、工女教育等の事業に、力を盡くすこと尠なからず。

大正七年五月二日、病み歿す。享年四十九なり。

三男三女有り。長男太郎、現、東京齒科專門學校に學ぶ。

長女千代、小島家に嫁す。他は皆な幼なり。

先生の逝けるや、鄉黨哀惜し、父母を喪ひたるがごとし。

相ひ謀り、安養山に葬り、碑を建てて以て長く英靈を弔はんとす。

法諡を忠誠院忍德教導居士と曰ふ。

大正八年五月二日、與野町並びに他町村の有志之を建つ。

師範同級生、小沼佐吉金子徳次郎撰し并せて書す。

石工井原赤太郎。

●人物

○本間金藏、小沼佐吉、金子徳次郎 埼玉大学教育学部（教友会）『會員名簿』明治二十四年四月尋常師範學校卒業者名簿に、この三名の名前がある。

○井原赤太郎 与野の石工。『埼玉県営業便覧』（一九〇二）「與野町」の「上町」西側（長伝寺のはす向かい）に「石工井原赤太郎」が見える。彼の作品は、与野鈴谷天神社の「凱旋記念碑」（一九〇六）や円乗院の「円乗院本殿修築記念碑」（一九一九）などがある。

●注

- 東京府 明治維新後、今の東京都に相当する地域を統括する役所として東京府が置かれた。昭和十八（一九四三）年、東京都に改組されて消滅した。
- 大泉村 現在の大泉地区にほぼ相当する地域を統括した村。明治二十四年に東京府石神井村の一部と、埼玉県新座郡の一部が合併して誕生した。本間金蔵が生まれた頃は、まだ大泉村としては存在しなかったことになる。
- 明治二十年 西暦一八八七年。金蔵十八歳。
- 埼玉縣師範學校 埼玉大学教育学部の前身。
- 業畢 師範学校の修了までの年限は、高等小学校卒業後四年（後に五年）、中等教育課程（旧制中学校等）修了者は一年（後に二年）であった。本間は明治二十四年四月の卒業なので在籍四年であった。そして卒業後、開校まもない葛飾小学校に赴任したのである。
- 葛飾小學校 現船橋市立葛飾小学校の前身か。明治二十五年の開校。
- 訓導 今の教諭。
- 幸手小學校 現幸手市立幸手小学校の前身。明治五年の開校。
- 同三十年 西暦一八九七年。金蔵二十八歳。
- 與野小學校 現与野本町小学校の前身。明治五年の開校。同二十五年に与野第一尋常小學校となる。
- 育英 英才を教育すること。また教育。「孟子」尽心上の「君子有三樂、…：得天下英才而教育之、三樂也（君子には三つの楽しみがある、…：天下の秀才を門人として教育し、これを立派な人物に育て上げることが、第三の楽しみである）」に基づく。
- 教育支會 教育会は、教師や教育関係者で構成する民間の教育団体。教員研修や研究活動が主な内容だが、組織によって様々である。一八七八年の東京教育会がはじまりとされ、その後全国に広がった。教育支会は、埼玉県の教育会の与野支部であろう。
- 教友會 不詳。教師の会ではないか。
- 青年會 青年団ともいい、青年たちによって組織された任意団体。ここでは、勤労青年の会で、学校へ行かずに働く青少年を対象とした教育や親睦の団体であろう。
- 工女教育 学校へ行かずに働く工女たちを対象とした教育であろう。
- 大正七年 西暦一九一八年。
- 享年四十九 没年から逆算すると、本間の生年は、明治三（一八七〇）年。
- 東京齒科専門學校 東京齒科医学専門学校だろう。現在の東京齒科大学。
- 法諱 戒名。
- 大正八年 西暦一九一九年。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【本間先生の名や出自】

先生、姓は本間、名は金蔵である。
東京府大泉村の出身である。

【師範学校入学】

明治二十年四月、埼玉縣師範學校に入学された。

【卒業と教師履歴】

学業を終えると、葛飾小学校の訓導として赴任された。まもなく埼玉県の幸手小学校に転籍された。

そして同三十年八月、更に与野小学校の訓導兼校長に栄転されたのである。

【与野小学校での本間先生】

それから二十年以上の間、本間先生は優れた才能を持つ子どもたちを教育することに力を注がれた。その人材育成の功績は顕著なものがあり、何度も賞賜を受けられた。

また与野の人々も本間先生に金品を贈って感謝の意を表し、その学徳を明らかにしたのだった。

本間先生のお人柄は、誠実で勤勉、子どもたちをよく導かれた。

一方、教育会や教友会といった学校教育に関わる諸団体の活動でも活躍し、勤労青年対象の青年会や勤労工女対象の教育事業にも力を尽くされ、少なからず貢献された。

【本間先生の逝去】

そんな本間先生であったが、大正七年五月二日、病のためお亡くなりになった。享年四十九歳であった。

【本間先生のご家族】

残されたお子様は三人の男子と三人の女子である。長男の本間太郎さまは、現在東京歯科専門学校に在学中で、歯科医の勉強をされている。長女の千代さまは、小島家に嫁がれた。その他の四人はまだ幼い年齢である。

【郷党の哀惜と、埋葬、建碑の企て】

本間先生がお亡くなりになり、郷党のものたちはまるで父母を亡くしたように悲しんだ。そして相談して、与野の安養山円乗院に埋葬することとする一方、先生を顕彰する石碑を建てて、末永く英霊を弔おうと考えた。

本間先生の戒名は「忠誠院忍徳教導居士」となった。

【記事】

大正八年五月二日、与野町並びに他町村の有志がこの碑を建てる。

師範学校の同級生である、小沼佐吉と金子徳次郎が撰文し、あわせて書した。

石工は井原赤太郎である。

三．資料

(一)「新編武蔵風土記稿」(文政十三(一八三〇)年)卷一五五 足立郡之二一與野領

◎與野町・寺院

○圓乗院

「新義眞言宗、京都仁和寺末、安養山西念寺と號す、寺領十五石の御朱印は慶長一九年に附せらる、當寺は畠山重忠の草創にして、古は近郷道場村にありしが、何の頃にや當所に移せりと云、彼道場の村名も當院にありしより起こりしなど、語り傳へり、重忠のことは道場村金剛寺の條に出たれば併せ見るべし、本尊不動を安ず、中興の僧を賢明と云、元和五年十月十二日示寂せり」

*鐘樓

「鐘銘に重忠の草創せしことをほぼ記したれど、證とすべきことなければ略せり」
↓この梵鐘は昭和十七年に戦争のために供出。今の梵鐘は、同三十四年の鑄造。

(二)「武蔵国郡村誌」(明治十五(一八八二)年)卷之十

◎與野町…仏寺

○圓乘院

「縦九十七間横四十一間面積千四百五十七坪町の南方にあり新義真言宗仁和寺の末なり(以下「風土記稿」)」

四. 主な参考資料

①翻刻

・『埼玉県教育史金石文集(補遺)』一九七一年。

・『与野市史 近代資料篇』一九八一年。

②論文など

・丹治健蔵『円乘院《与野》(さきたま文庫十六)』さきたま出版会、一九九〇年

以上

二〇二五年二月 薄井俊二訳す